The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	街角の哲学 ： 臨床哲学カフェ&バー報告
Author(s)	桑原, 英之
Citation	臨床哲学のメチエ. 2000, 7, p. 56-57
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7823
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

街角の哲学

臨床哲学カフェ＆バー報告

桑原英之

去る11月５日、当研究室は應典院で開催されたコモンズフェスタ2000（注１）に臨床哲学カフェ＆バーという企画をもって参加した。以下はその内容及び感想を含めた報告である。

そもそもこの企画はヨーロッパを中心に盛んに行われている「ソクラテス・カフェ」（注２）を参考にしたものである。指名されてから発言する、他人の話はよく聴く、といった基本ルールはそれと同じだが、テーマは参加者から募らずにこちらが予め決めていた点はそれと異なる。

とりあえず全体の流れを先に述べておくと、最初の30分はカフェ＆バーへの導入も兼ねて当研究室の中岡・鷲田両氏による、「なんで哲学？やっぱり哲学！」というタイトルのもとざっくばらんな対談を行い、その流れを受けて簡単なルール説明のあと３つの会場に分かれ、哲学カフェ＆バーへと続く。そして会場によって「自己決定」「幸福と不幸」「恋愛2001」という違ったテーマが設定されており、来場者は自分の興味のあるテーマを選んで各会場に分かれ（途中入退場及び途中で別の会場に移ることも自由）、その対話の進行役を当研究室の者が２人ないし３人で務めるという方式を取った。会場によって参加者の人数は異なるが各会場およそ15～30名であり、立ち見を強いることなくすんだことはとても幸いである。全体としては70～80名程度で男女比はおよそ半々、20代から80代まで幅広い年齢層の方が参加された。次に各会場の様子について簡単に述べたい。

まず「恋愛2001」について。漠然としたところからいきなり一つの軸を深く降りていくというよりも自分の経験からとりあえずは軽いノリで話してみたり、進行役が特定の論点にあまり縛ることなく幅広い内容から始めたりと手探りの中始まった。途中、休憩をはさんで後半から「恋愛と家族」というテーマに絞って（勿論それへの異議も含みつつ）対話がなされた。「恋愛」という大きなテーマで問いを共有することの難しさはあったが、最終的にその多様さを認めるところには行き着いたようだ。

次に「自己決定」について。テーマの堅さからいって一番敬遠されるかと思いきや、実は一番参加者が多かった。昨今のメディアを通じて、或いは自分の現実問題として、かなり身に迫ったテーマなっているのかもしれないが、これもドリンクの種類の決定から安楽死まで

幅広く意見が出た上で、「自己決定の能力をどのようにして教えるのか」という論点に絞られた。とはいいつつも、やはり参加者個々人の経験や考えの多様性を反映している為、その論点に必ずしも収斂させず、幅広い対話が行われたという方がより正確ではある。議論そのものはかなり整然と且つ活発に行われた。

最後に「幸福と不幸」について。幸福と不幸という対は形式として対極にあるが、そもそも或る状況を幸福と感じるか不幸と感じるかは人によって全く異なり、時と人と場合によって幸福と不幸はあっさり反転することもある。そんな中で印象深いのは参加者が「土壌」という言葉を使って幸福・不幸について語っている部分であった。つまり彼氏/彼女とじゃれている時が幸せなの、といった具体的なイメージよりも、衣食住が足りて戦争がないという「土壌」、他者によって自分の存在が認められるという「土壌」について語ったことだ。自分の幸福・不幸を経験的に語ろうとして他者や社会との関わりの中での幸福・不幸を育む「土壌」の話がでてきたところは面白かった。

以上はざっと、企画を進めた側からみた感想であったが、実際に参加した方の意見も幾つかみておくことにする（参加者にはアンケートを配布し感想等を記入してもらった）。

回答者の大方の感想としてはおおむね好意的で企画を評価する声も多かったが、各会場共通して多くあった意見として「いろんな人の考えや意見を知ることができた」というものと「議論を深く掘り下げることができなくて残念」という、ちょうど表裏一体をなす意見が多く見られた。これは単に時間的制約のみならず、全くの見ず知らずが集まって特定のテーマについて語り合うことのもつ魅力であり難しさであり、と同時に進行役の力量が問われる場であることをあらためて痛感させられた。もう一つ多かった意見は、「考える」ことのきっかけになったというものである。普段当たり前のように行っていたはずの「考える」ということの意味を、他人と共に考えた経験からもう一度反省的に吟味する、そういうきっかけになったというのは何も参加者のみならず当研究室の者にとっても又同様であった。

継続を望む声が少なからずあった。機会をみてまたこのような企画をたてたい。

（くわばらひでゆき）

注１：應典院とは大阪市天王寺区の寺院であるが、「学び、癒し、楽しみ」の３つをモットーに、地域に開かれたお寺を目指して秋田住職を筆頭に幅広い活動を行っている。このコモンズフェスタも様々なNPOの出会いと交流を目的として、３年前から毎年開催されているイベントである。

注２：ソクラテス・カフェとは1992年にマルクソーテを中心にしてパリで始められた哲学ディスカッションである。カフェに集まった参加者各人が提起するテーマの中から司会者（哲学者）が一つを選び、それについて議論をするというものである。詳細はマルク・ソーテ著、堀内ゆかり訳『ソクラテスのカフェ』（紀伊国屋書店）参照。

「幸福と不幸」（上）と「恋愛2001」（左上）